

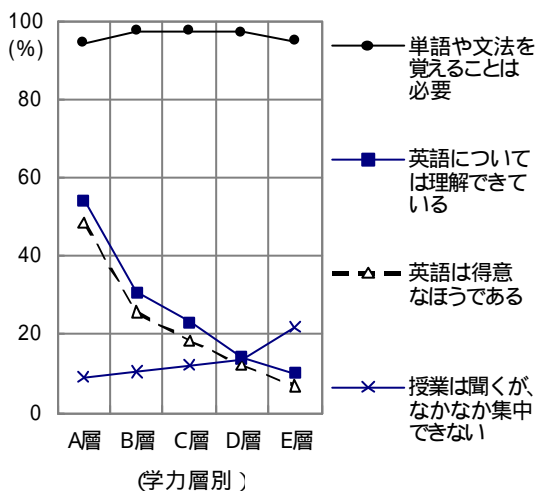
英語

偏差値 50, 60の壁を乗り越えるための学習と指導

第1節 偏差値50の壁を乗り越えるための学習と指導

1. 理解したことを覚えているか？

グラフ1



グラフは、それぞれの質問について「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」と答えた割合の合計 (%)

学習習慣に関する調査の結果では、英語の学習について、どの学力層においても94%以上の生徒が「単語や文法を覚えること」の必要性を自覚している。しかし「英語が理解できている」と答えた生徒は、学力C層で

23.1%、学力D層で14.1%しかいない(「非常に」+「やや」あてはまると答えた割合)。

単語や文法を覚えることの意味や重要性は自覚していながら、覚えるべき内容が十分に理解できていない。理解できないことを覚えても実力として身につかないし、少なくとも長期的な記憶として残ることは期待できない。一般的に英語が苦手な生徒は、自分で内容を理解できていないことの棒暗記(丸暗記)に必死になり、膨大な時間を浪費する傾向がある。労多くして益少なしである。ではなぜ内容が理解できないのだろうか。生徒の努力不足も大きな要因であろうが、ここでは教科書や教材のレベルについて考えてみることにする。

2. 教科書・副教材のレベルは適切か？

各高校では生徒の学力に合った教科書が選択されているはずであるが、特に進学者が多い高校では、実際には生徒の学力よりも高いレベルの教科書が選ばれる傾向がある。概して、教師が適切と判断する教材を生徒は難しいと感じ、教師がやさしいと思う教材を生徒は適切と考える傾向がある。成績上位の生

各学力層の区分定義

A層	B層	C層	D層	E層
SS60以上	SS55～60	SS50～55	SS45～50	SS45未満

(注)本文で紹介するデータは、全て本調査の参加者全体(15校)の合算集計である。

集計人数(英語受検者)

前回	平成8年 4,901人 平成7年 4,959人
今回	平成13年 4,153人

生徒は教科書のレベルによって影響を受けることはあまりないが、中位や下位の生徒の場合は、教科書のレベルによって大きな影響を受ける。十分に基礎ができていない生徒が、程度の高い、難しい問題集などに取り組み、先へ先へ進もうとしても学力は伸びない。学習材料に無理があるからである。学力に合わないレベルの高い教材を用いると、かえって英語力は伸びない。「分かる授業」の前提になるのは「適切なレベルの教材」の選択である。そのためには、使用した教材のレベルが適切であったかどうか生徒に評価させることも必要であろう。

3. 生徒に意見を求める

学力中位群・低位群の生徒の指導ほど、授業が「教師 生徒」へと一方通行になり、生徒の授業に向かう姿勢は受け身になりがちである。その結果、活気のない授業のマンネリ化を生み、生徒の学習活力も低下する。そこで授業や教材について生徒に意見を求めてみる。その意義は、 ↗

生徒理解が深まる。

授業や教材について、生徒の視点から示唆が得られる。

授業の欠点や改善点を知ることができ、具体的なやり方を工夫する示唆が得られる。

などである。

英語を苦手とする生徒に対する教師のあるべき姿は、「“何とかして生徒のみんなに分かる良い授業をしよう”と熱意を持っていることを、生徒に感じてもらうようにする」ということである。それによって生徒も意欲がわき、英語の勉強を頑張ろうという気持ちへと発展していく。そのような教師の姿勢を示す一端が、使用教材について謙虚に振り返る機会の設定である。

4. 50の壁を越えるために必要な学力

以下は学力 C 層と D 層の間で正解率に差がついた問題である。

20 は会話に特有な口語表現の知識、対話の具体的な場面・状況を把握する力、登場

学力 C 層と D 層の間 (偏差値 50 前後) で正解率に差がついた問題

(その1) 第2問 B 会話文

問4 次の問いの対話の空欄に入れるのに最も適当なものを、 ~ のうちから一つ選べ。

A: Hello. Can I speak to Dave Edgar, please?

B: I'm afraid he isn't home from work yet. Who's calling?

A: This is Eve Maxwell, a friend of his. 20

B: I'm not sure. He sometimes works late.

Could you tell me his office phone number?

Do you have his message for me?

Do you have any idea when he'll be back?

Would you have him call me back?

(その2) 第5問 長文読解

文章を読み、問いに対する答えとして最も適当なものを、一つ選べ。

問5 What lesson do we get from this story? 36

Don't go to a gas station before a snowstorm.

Don't judge before you know all the facts.

Don't tell your secrets to your employees.

Don't trust short-tempered people.

(素材文は巻末に掲載)

学力 C 層と D 層の間 (偏差値 50 前後) で正解率に差がついた問題 (つづき)

(その 3) 第 3 問 B 整序問題

次の問いでは、空欄に入れるべき四つの文が、順不同で、下の A ~ D に示されている。
意味の通る文章にするのに最も適した配列を、一つ選べ。

問 2 You may have a job that you do on your own. Or you may have a job that involves doing tasks with your co-workers. 28 And you will do a better job. At the same time you will make friends with more people.

- A. Then all of you will feel more satisfaction and less frustration.
- B. It is best to talk openly to people you work with in this way.
- C. That means you must share information, discuss problems, make plans, ask questions, and go along with each other.
- D. When you work together with others, you must coordinate your efforts.

B - C - D - A
D - B - A - C

B - D - A - C
D - C - B - A

人物の人間関係を推測する力、話題と発話内容との整合性をとる力、文意が成立するように適切な台詞せりふを選択する力が求められる。結局は、対話の流れをつかむ能力である。

36 は登場人物と時間・場所や品物を押さえて、それらの関係を整理して、必要に応じて主人公の心理状態を正しく把握する力、速読速解力(本文も選択肢も)が求められる。文章の流れを把握する力である。

28 は連結語や代名詞、相関語句に配慮しながら、「抽象 具体」や「原因 結果」など論理的に英文を構成する力が求められる。

いずれもかなり高度な英語力が試されている。基礎学力が不足している生徒がこのような問題に対処していくにはどうすればいいのだろうか。

5. 読解と並行した単語・文法の定着

英語の基礎力が不足している生徒のほとんどは長文を読むスピードが極端に遅い。その理由は未知の単語が多すぎることである。最低限これだけは必要、とされる単語や文法の知識が詰め込まれていなければ、効率的な長文読みは不可能である。単語や文法の知識があれば、辞書を引いたり、考え込

んだりする余計な時間を節減できる。

しかし、「文法と単語を覚えてからでない」と思い込んでいる生徒は意外と多い。確かに、文法と単語を知っていれば長文が読みやすくなるのは事実であるが、そのためだけに時間をかけるのはバランスを欠き、効率も悪い。最低限の文法と単語を身につけた後は、長文読みにすぐに移行した方がよい。

英語の基礎力が足りない生徒は、高3生であっても中学校～高1段階の基本重要単語が身につけていないので、その単語を短期集中的に確実に覚えさせ、あとは長文読解の中で単語力増強を図る。読みながら覚えることによって単語の定着を強化することができる。

文法については、高1レベルの文法をしつかりと復習させる。読解に必要な文法は、

動詞の語法 (パターン・文型)

関係詞

準動詞 (不定詞・分詞・動名詞)

比較・否定などの重要構文

倒置、強調構文、省略

である。完全にマスターすることは無理であろうから、あとは長文読みの際の辞書引きの中で単語の用法等を確認させ定着を図る。

英文の意味を理解していく上で重要な

は、まず「誰（何）がどうした」という、文の骨子を作る主語と述語動詞を見抜くことだ。また、構造が分からない英文にぶつかっても辞書で単語の用法を確認していくと、そこから活路が開けてくることも多い。なお、長文の題材は先にも触れたように難しすぎないレベルのものを選ぶ必要がある。

最近の入試は「正確な和訳」よりも「一読して内容を把握する力」が重視されている。長文読みに慣れていないと入試では苦戦を強いられる。単語・文法の力をつけるだけでは入試は対応できない。適切なレベルの長文を大量に読みこなす中で単語力と文法力を同時につけていく必要がある。

6. 書く作業の重視

- 理解の深化と定着の強化のために

視覚世代の生徒は、目で見て覚えようとする。しかし「理解を深めること」と「定着を図ること」の2点については、書く作業を抜きにしては考えられない。意味が理解できている英文を繰り返し音読することは話す力と書く力をつけるためにも有効であるが、特に中位レベル・下位レベルの生徒にとって、大切なのは意味が理解できている英文を繰り返し書くことである。そして、日本語を見てその英文を再生できるレベルまで書くことである。英語の力がある生徒は、基礎的な英文をできるだけ数多く頭の中に蓄積しており、必要に応じて出していける。そのレベルまで引き上げていくためには、生徒にそれ相応の努力を求めなければならない。

7. 授業で何をやるのか

「何を授業時間の中でやるべきなのか」と
「何を生徒の家庭学習に任せるべきなのか」

を厳しく問い、整理しなければならない。家庭でできること、あるいは家庭でしなければならないことを授業時間の中でガラガラと続けていることが結構多い。家庭学習でやることと、その意義を生徒に説いて納得させ、書くことと読むことを中心とする生徒の家庭学習が充実してくると授業も充実し、学力向上の環境ができてくる。

8. やさしいものを難しく教えない

難しいものを分かりやすく教えるのが教師の仕事であるが、われわれ教師は、やさしいものを文法用語を多用して難しく教える傾向がある。文法用語の使用は必要最小限に押さえ、既習事項との類型や比較・対照を駆使して、説明に工夫を加えたい。教師の説明が不明瞭なことを無理に覚え込む苦役を生徒に押しつけるべきではない。

9. 努力を三ヶ月間は継続させる

一般的に学習には「累乗」の効果がある。勉強量と成績の関係は、単純な比例関係にあるのではなく、むしろ等比級数的な上昇カーブを描く。

つまり、勉強に取り組みはじめて間もない頃は、その努力の割に成績が伸びる（理解の度合いが高まる）実感を、なかなか持つには至らない。しかし、手抜きをしないで努力を続けていくと、成績は1、2、4、8、16、32・・・のように伸びていくのである。

一方で、生徒は「努力をしたほどには成績が伸びない」と感じた時点で努力を放棄してしまうことが多い。しかし、辛抱強く勉強を繰り返すことのできる生徒ならば、成績はさらに64、128・・・とアップしていく。ここまで努力をして、やっと勉強の効果が目に見え

て実感できるようになる。

これが勉強と成績の関係の本質であり、勉強の成果は勉強を辛抱強く継続してやっと現れてくるのである。

勉強を継続していると、山頂に立ったときのように突然視界が開けて、物事の理解ができるようになったと感じる悟りに似た時があるが、これこそが累乗の効果である。効果ははっきりと目に見えてこなくても、努力した分だけ着実に、基礎力は蓄積されていく。一般的に、勉強を始めてから効果がきちんと現れるまでに、どんなに早くても三ヶ月はかかると言われる。生徒にはこのような情報を伝えて継続的な努力を奨励しなければならない。英語習得の過程で絶対に欠かせないものは「繰り返す努力」と「めげない根気」である。

10. 授業で鍛える

一斉授業が抱える

教師の指導が中心となるため、生徒が受け身になりやすい。

生徒一人ひとりの能力や進度に合わせられないので、生徒は自分の勉強のペースを守りにくい。

という弱点を克服するため、次のような学習環境を作っていく必要がある。

生徒の能力や特性に応じた指導を行うクラスメートが協力したり、競争したりして学習し、自然に競争意識と連帯感が芽生え、学習効果を高める雰囲気を作る。

教師と生徒が人間として触れ合い、お互いの感情と意志の疎通をはかる。

予習・復習で分からなかった点が質問できる雰囲気を作る。

第2節 偏差値60の壁を乗り越えるための学習と指導

1. 壁を越えるための学力は何か

領域別の正解率を見てみたい。学力C層とD層の間(境界は偏差値50前後)では、「文法」と「作文」に差が見られるが、学力A層とB層の間(境界は偏差値60前後)では「語彙」と「リーディング」において差が大きい。(グラフ2)

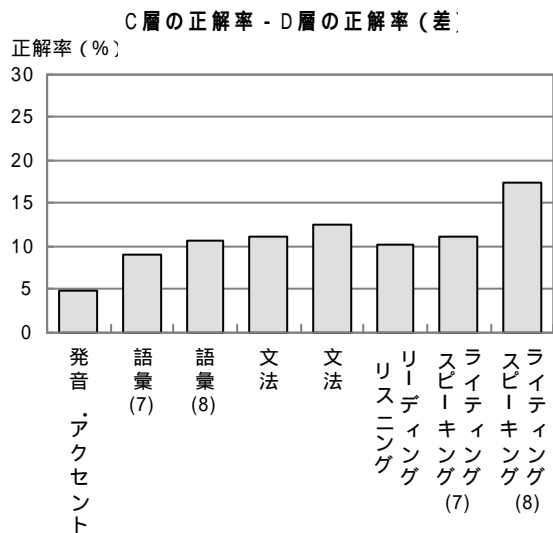
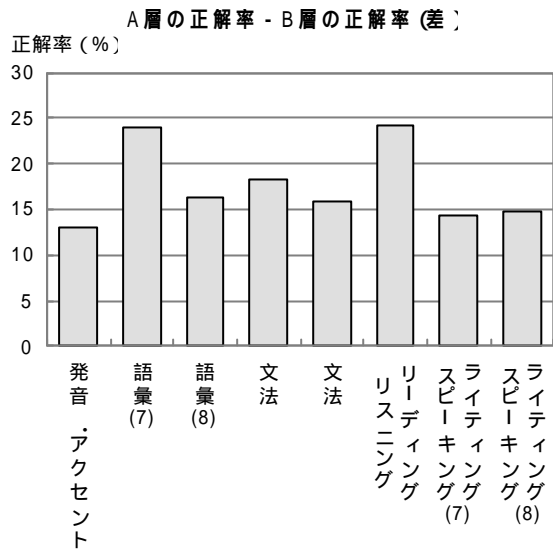
語彙力と長文読解力をつけるためには長文の読み込みが不可欠である。英文(長文)の読み込み量の差が偏差値60の壁を越えるかどうかを左右する重要な要因なのである。

では、この偏差値60を切る生徒が読むべき英文のレベルはどのようなものであるべきだろうか。

2. + の負荷を持ったレベルの長文

偏差値60の壁を越えようとする生徒が学習する言語材料には、生徒の理解度を少し上回るレベルの内容(+)が含まれていなければならない。教師は限られた時間の中で、英語をシャワーのように生徒に浴びせかけるようにして最大限のメッセージを与えるのである。しかし、いくら英語のシャワーを浴びせても、その中身が理解できなければ言語の習得は起こらないし、内容が生徒の理解力に適合した難易レベルでなければ実力は伸びない。そこで教師は、そういう多量の教材が、生徒にとって適切な難易であり、+ の言語材料を含んでいるかどうかを絶えず確かめる必要がある。ところで、いくら多量に英語の教材を与えても、生徒が食いついてくれないければ意味はない。そこで教師は生徒

グラフ2



* 語彙、「ライティング・スピーキング」の(7)・(8)は該当問題の出題年度を表す。

* 正解率: 正解設問数 / 全設問数 × 100、の数値について受検者の平均をとったもの(以下同じ)

の知的水準や、能力を勘案しながら、絶えず魅力ある教材を選定する必要がある。+ の教材選定のためには、教師は生徒の学力把握は勿論、与えられている教材が理解されているかどうかを確かめる check of understanding の作業を意識的に各教材ごとに行わなければならない。生徒から評価や感想を求めることの重要性は第1節3. で触れた通りである。

3. 教えすぎない

教えすぎが原因で生徒の学習意欲が阻害されるケースがある。完全週五日制の導入により、英語の授業時間数が減少するため、教員は少ない時間数の中に多くのことを盛り込もうとし、ますます教えすぎに拍車がかかりやすい状況にある。講義中心の授業が展開され、多くの生徒が消化不良のまま進度だけは先に進んでいるという状況が増える危険性が高い。教える量を単に減らすのではなく、何は教え、何は教えないで学ばせるか、つまり、学び方をいかに育成するか、という視点からの見直しが必要である。全てを教えようとしたり、教える量をカットして済ませるのではなく、生徒の自己学習能力をいかに育成していくのかを真剣に考える必要がある。教師が教えるという行為は、生徒が学ぶという行為が保証されて初めて意味を成す。一コマの授業の中において、教えるべきところと生徒の学びに任せるところを考えて、指導と学習が両立していく状況を作り出す工夫が必要である。

“ We cannot teach a language; we can only create the conditions under which it will be learned. ”

(von Humboldt)

4. 予習の役割と効果

学習はまず予習から始まる。偏差値 60 を切る生徒が授業の内容を最大限に活かし、学力を着実に伸ばしていくためには、家庭で予習していくことが必要不可欠である。予習をどの程度していくかによって、授業中に身につく内容や理解度に大きな差が出る。

予習の役割と効果には、

授業の内容が予想でき、重要なポイントが分かり、説明を早く理解できる。

疑問の部分がどこにあるのか分かるので、その点を理解しようと積極的に授業に集中できる。

内容が分かり、重要な点が推測でき、理解も早いから、無駄なく、要点だけを整理しながらノートが取れる。

自信と余裕を持って講義が聞ける。

予習中に、疑問点にぶつかった時に、前に出てきた問題を復習し直す必要に迫られ、基本学力の強化に役立つ。

十分な予習は、講義内容の理解を助け復習の時間と精力を節約できる。

予習をやると教師の話がよく理解できるから、疲れないし、授業が短く感じられる。

などがある。

同程度の学力レベルの生徒でも、予習をしっかりしてきて、授業中に自発的に学習しようと努力し、講義内容を理解しようと、目的・目標を持って、積極的に授業に参加している者と、予習もせず、目的・目標もなく、ただぼんやりと受動的な態度で教師の話をしている者とは、次第に学力に差が出てくる。積極的に授業を受け、精神を集中している生徒の方が、理解すると同時に記憶もしているので、復習確認テストの結果も良い。一方で、受動的に教師の話をしている生徒は、考えごとをしたり、眠くなったりして、どうしても注意力が散漫になり、理解度が低くなってしまふ。

5. 復習の効果と方法

家庭で十分に予習をして、授業に出席し、いくら熱心に教師の説明を聞いても、受けっぱなしでは学力の向上は期待できない。学力の向上をもたらす英語学習の3大原則は、

必ず予習すること

授業で完全に理解すること

復習して完璧に覚えること

であろう。この3原則をいかに生徒に義務づけ、実行させることができるかで、受け持つ生徒の学力は決まってくる。

と については先に触れたので、ここでは復習について考えてみる。復習には、基本的なパターンとして次の3つがある。

整理

その日の授業で習ったバラバラの材料を、ノートなどに順序よく並べ、系統づけたり、分からなかった所を調べたりすること。また時には、前に学習した材料と関係づけたりすることである。整理作業によって、同じ内容をもう一度学習するので理解が深まり、記憶が確実になる。

練習

授業中に学んだ内容の反復練習である。英語の読み書きなどの反復練習は、忘却を防ぎ、暗記に欠かせない作業であり、記憶を増幅し、学力と学習習慣を身につける基本である。

補強

授業でカバーできない自分の弱点を確認し、補う学習である。授業で習った基礎的な事柄をさらに発展させ、応用力をつける作業も補強の中に入る。

また、記憶の定着を完全にするための指導としては、

ア 毎日テストを実施して、昨日の学習内容を完璧に暗記したかどうかを確認する。
イ 完璧に暗記するまでテストを繰り返す。ことなどが必要である。学習の基本、学力向上の絶対条件は、予習 授業 復習の輪が渾然一体となって機能し続けることである。

6. 復習による効果的・能率的な記憶

生徒に復習を効果的に行わせるためには、次のような教師からのアドバイスが有効であろう。

完璧に覚えることを目標に、意欲的に取り組ませ、限界点を越える学習を体験させる。

記憶力は体調や気分に影響されやすいので、学習前後に、不快・不愉快な経験をできるだけさせないようにする。

学習作業が遅いと精神集中度が低下するので、教科書やノートを速く読ませ、単語や文を速く書かせるようにする。

記憶しようとする内容について、復習の「整理」の段階で要点をしっかりとめ、秩序立てたり、系統立てたりする。

短い時間内に可能な限り多く記憶しようと最大限努力させ、積極的に取り組ませる。

何回でも覚えられるまで反復させる。

最初、黙読で覚え、次に音読して暗記し、三番目に音読しながら文字に書いて記憶するというように、反復練習するとき、感覚器官を変えて使ったり、できるだけ多くの感覚器官を同時に動員したりして記憶させる。

7. 更なる語彙力のアップ

以下は学力 A 層と B 層の間で正解率に差がついた問題のトップ3である。いずれも語彙力が出来不出来の要因となっているようである。

学力 A 層と B 層の間（偏差値 60 前後）で正解率に差がついた問題

(その1) 第4問 長文読解

文章を読み、下の問いの空欄に入れるのに最も適当なものを、一つ選べ。

問2 Physically handicapped people feel tense when someone passes them on the escalator, .

and it is one of the reasons the author disapproves of leaving one side open but they will become accustomed to it after using escalators many times but they will be all right if they firmly hold on to the handrails so escalator steps should be made stronger and wider

(素材文は巻末掲載)

(その2) 第2問 A 文法・語法

次の問いの空欄に入れるのに最も適当なものを、一つ選べ。

問3 "This suit of yours is a bit out of fashion now."
"Yes, but I like it. And , I can't afford a new one!"

besides despite therefore yet

(その3) 第3問 A 整序問題

次の問いにおいて、下の ~ の語や語句を並べかえて空所を補い、文を完成せよ。

問3 English is now an international language and through it we will be able to communicate, .

come from no matter of the world
we what part

「偏差値 50 の壁を越えるための学習と指導（第 1 節）」の中で、英単語・熟語は長文読解の中で覚えていくということを書いたが、別の考え方をすると、強引ではあるが短期集中的に覚え込む方法もある。

英単語を集中的に暗記する勉強の効果は、記憶力増強のトレーニングになる。

長時間勉強する習慣を身につけ、耐久力、集中力を養う。

語彙が増え、英語の基礎力がつき、英語の学力向上に直接結びつくだけでなく、同時に、他の教科への学習意欲がわいてくる。

やればできるという自信がつく。

などである。短期集中暗記と長文読解の中で覚える 2 つの方法を併用していけば単語力は着実に身についていく。

覚える際には、類義語や反意語などの関連語を同時におさえていくのも語彙力を増やすコツである。また、接頭辞や接尾辞に注目させることも必要である。

8. 予習における和訳について

次のグラフは各学力層別の英語の学習状況である。(グラフ 3)

特に予習段階での本文訳については、上位層と中・下位層において取り組みに差が出ている。

予習段階で本文を訳すことについては以下のような工夫が必要である。

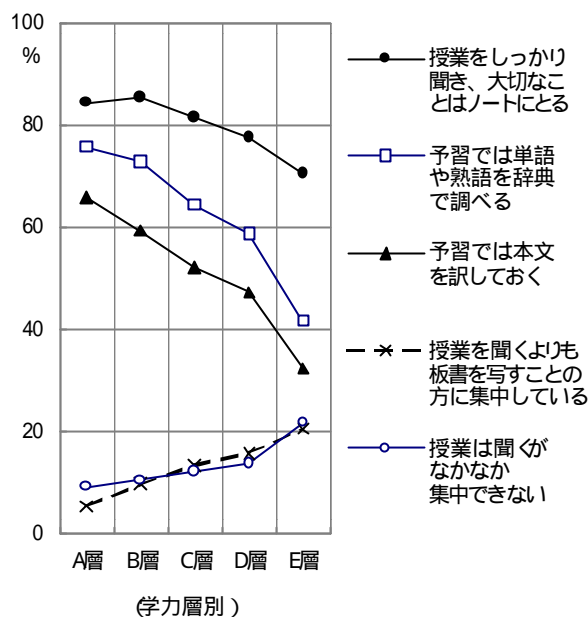
和訳はきれいな字でなくても良い。

とりえず自分が読める程度で十分である。

辞書で調べても分からなければ赤ペン等で印をつける。

「どこが分からなかったか」を分かるようにしておく。

グラフ 3



グラフは、それぞれの質問について「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」と答えた割合の合計 (%)

日本語の表現の細部にはこだわらない。英文の構造がつかめているかどうかを重視する。

読めなかった英文にこだわる。

訳せなかった英文には線を引くか、ノートに書き写して、S、V、修飾関係などを教師の説明や辞書を頼りに徹底的に分析する。構造分析をした後に自分の和訳を書く。

実力がつくまでは、訳すのに時間がかかるかもしれない。しかし、自分で苦労して調べた単語、知らなくて訳すのに苦労した構文や文法は頭の中に残る。まず、自分で辞書を引き、知らない単語はきちんと書き出し、前後の文脈にも注意を払い文章の意味を考える。これが英語の力をつけるいちばんの近道である。

また、和訳が自己目的化して、直訳か意訳かなど、英文の意味を把握することではなく

日本語の表現の方に重点が置かれすぎないように配慮しなければならない。また、和訳の作業が習慣化して、訳さないと理解した気分になれないというようなことが無いようにもしなければならない。

和訳の作業は意味内容の理解が主要な目的であるが、授業自体の目的はこの内容理解にはとどまらない。内容理解は、授業の目的ではなく、あくまでも出発点である。意味内容の理解の上に、その言語材料を使った言語活動があり、その言語活動を通して、言語能力を高めていくのが授業の目的である。

9. 訳したあとの通読

授業も家庭学習も訳して終わりということがないようにしたい。知らない単語や訳せない英文がなくなった段階で、全体を2回ほど通読すると力になる。

10. 読み慣れる

英語を速く正確に読めるようにするには、英語をたくさん読むこと、読み慣れることである。英語をたくさん読み、読み慣れてくると、英語のリズムが伝わってくる。リズムが出てくると、おのずとスピードがついてくる。ある程度スピードがついてくると、単語や構文に気をとられないで、話の筋を追うようになる。話の内容がくっきりと浮かび上がってくると、話の展開の仕方が予想できるようになる。事態の進展が予想できるようになったら、読むことが楽しくなり、読解力は飛躍的に向上していく。偏差値 60 の壁は、読み慣れを踏み台に越えていかなければならない。